新編

稗史通

913.5
N814h

292.7N814h

松村操校閲
西村宇吉編

新編神史通

東京 耕文社發行

国立国会
29.10.19
図書館

348343

大多不能讀文而無人不能讀
神宮神宮國之史之文流
傳頌耳長讀神
宮者和可謂庭於讀之故古
人不廢
癸未七月

春風居士松村操題

913.5N814h

大多不能讀文而無人不能讀
碑官碑宜因六史之文院
特隙繹其詞耳美讀碑
官者亦可遲於讀文故古
人不廢

癸未七月

春風居士松村操題

東京帝國大學圖書之印

山東京傳
曲亭馬琴
宵延

十返舍一九
式亭三馬

凡例

一世それ書を讀む者い多くその人を知るを尠し殊ょ近比い飜刻とうゐふ事行れそをもく己ゞ衣食を謀れどもそれ徒ょしく猶著者の氏名をゞに知ふざるもあるとと聞々り是等の人れ云る面にせまほしうく此書い編出しゝあるる

一一言一行をも編者ごの自恣ょせを必出所ありたゞ煩ゎを憚りく書名をゞ云るさおを又諸家を叙そるょ敢學德れ高下年代の前後に拘らず筆れまょ〳〵是を錄しり

一傳毎ょ賞贊の詞多し、そい人々れ名譽を傳へんとの意ょく美事のみゝき載たをばさくい賞美れ語多ゎと知るべし

新編稗史通

春風居士閲　西村宇吉撰

○十返舍一九

氏を重田、名を貞一、通稱を與七といふ駿河の人あり居を江戸橘町ょ占ゎ又深川佐賀町に移り終ょ通油町に定ひ

一九幼時市九とよぶ故に市を一ょ作り雅号とを弱冠の比江戸に來り一侯に仕へその〳〵ち大坂に往き彼地に住み旁香道を嗜て譽あり十返舍の号い黄熟香の十返をとりて云り呼といへ其比の事にや並木千柳と倶ょ木下蔭狹間合戰の繰戲曲を作りさるよし後故ありて香道に遊ぶを禁を寛政六年ふさ〳〵び江戸に來りて戲を稗史雨三部を著をれその著作の始なりといふ

一九の著しりる書彼世ょ聞え高ゎ膝栗毛を始として文政の比に至りてい既に二百餘部ょ及ぶ就中滑稽の作ょ長し看者をあ頤を解き愛笑ひくやまを吾邦の才子書

とゝ實に此人の著編などをやゝふべうるらむ

一九性酒落わして俗務に汲々さゝぬ故よ米錢饒ありとて喜べる色なく乏しゝれど又更にあれを憂へぬわるほどの錢みあ酒にゝへておのれも食ひ人にも飲せおよあ き娛樂とも有る調度あども多く人に取らせて家のうち最あぞれさりけゝ壁を白き紙にくゝりて簞笥床の間違棚花活懸物の類みあ畫ごきて又傍にい土庫の入口あ どゝきたり遠くより望み見るときい富める人の家れ如くにく近くよりて見れば皆畫ごきたるものあをゝ人々その奇趣に驚き感せざるゝあし七月の此あどい中元の魂棚かざゝんにも物あけれをこれをも繪にかきて壁にはり朝い素麺供へんとて畫ごきてゝり暮よい餅さゝげんとて亦ゝきてはる年の暮ゐあれば大なる臺に三尺餘の鏡餅載さる圖をかきて壁にゝりしとぞ

ある年の除夜に一九俗事の煩きを避け黄昏よりそこゐゝと遊びありきけるゞ柳原の邊に日ごろ睦み語らふ友のありけれゝそゐに行しに此友も家に在りて酒を飲てをり一九嬉しく思ひて俱に酒飲てさわぎしゞ果い立て舞踏とて一九もとより身材高ければ偶傍の棚よ頭いさく打つけつ此棚い溝らある板もてあきのかたに向ひ筋違ひに吊りたる年徳神の棚なりけれゝ一九とりあへぬ狂歌一首をよみて

正月ゝはや神田まできさりけん

筋違につるとー徳のさな

と口号む主いと面白しとて近隣にいもきて物語りけれゝ此隣の酒店の主聞てさらば先生を招きさまはれといふ一九い何にかあらんとて往けるに酒店の主床の袋戸よ指さして曰この戸い嚮つ比名ある畫師に乞てものせしに月に杜鵑をかゝれたり此鳥い蜀魂死出の田長冥途の鳥又い血を吐く鳥あどといひて最忌ゝしき鳥ゝ加旃月い陰のものよて常に心にかゝりぬ願くい先生これによろしく歌よみて賜べといふにゝ一九易き事ゝとくやゝでて筆執て

月ゝ笠鳥のゝさちゝ簑に似てあれや寶の山はとゝぎゝを

とかきけり主人大に喜びて此禮にい何をか進らせんといふに一九聞てさゝ酒を賜されといふさらば進らせべしとて酒肴所狹きまで取出してさまゞと饗應ければ一九此夜いとゝにて酒を飲み太く醉ていざ還らんとて暇を告て立出しが傍の土庫の前に居風呂の桶ありけるを見て此桶貸しさまへといひければ主答へて最易き事とといふ一九直に持出さんとそるを主おし止めてそれ餘りに不禮なり明日小衘に擔せて進らそべしといふを一九頭をうち掉て否みかゞのりの物持行んにいのでくるしかるべきとて彼桶倒にしてうち冠りて出行けるにとや天明に近かりけれど除夜のとなれば往來の人も絶えぎ一九を見く異むもあり臆病の人い桶の怪物ゐらんとて逃んとそるも多かり或人あれに衝中りて此白物おどて吾に中りしぞと怒りければ一九桶の中より罪い汝にあり吾い桶冠りてもの見えぎと呟けばその人もうち笑ひて行過ぎぬ一九太く醉つるうへに桶うち冠りければ足いひさそらよろめきつゝ辛して家に還りけるに既にして夜い明たり元日の朝風いと寒くて耐凌ぐべからぎ一九彼桶に若水汲いれてみづから火を燒き湯を沸してこれに浴して身を温め最心地よしとて喜ぶと限おしかゝる處に日比睦しく交らふ近江屋といふ商家の主上下衣服おどきらゝしく打扮て初春の祝賀述んとて入來ぬ一九大に喜び先酒を出してこに飲せ吾も盃を傾てさていとく今日い風いと寒し浴してゆきたまへといふ質屋の主ろい辱しとて頓て上下衣服おどそこに脫ぎおきて裸体になりて居風居に入りけり一九い小屏風持來て風呂の周圍を掩ひて外を見せぎその人の脫ぎ置つる上下衣服手早くうち着て扇脇差ぎで腰ゑ挿しそと脫け出て近邊の友人けりゝを年始の禮ありとてありけゝる彼人い浴し訖りて見れど己ごの衣服上下俱ゐなし一九も居ざりけきば大ゑ驚き一九ごの脫置つる衣服を着て外に出て此處彼處と尋ぬれば先生と嚮ゑ年禮ゑ來られしといふ家あり此人い素より一九と心隈ゐく親み交るものゐきどそれ雅趣と感て手を拍て笑ふばりりあり一九い心の眼り年始の禮述めぐりて黄昏比かの近江屋に至りて年頭の禮おれべとて奥に入りぬ主一

丸を見てまた〳〵うち笑て已まぬ一丸いやがて衣服うち脱てかゝへに置き今日は君の御恵によりて年禮をもつとめたり猶此上の恵はと酒を賜とりなんといふ主いよ〳〵面白しとて頓て酒とり出して飲せければ太く醉てその夜子の刻むかりに還りしといふ

一丸常は遊郭に入り遊むざる樓もなく面識あらざる妓もあしかゝる高名の人に親兄ばかのづから他の客人を招く障碍となるものなればとて娼家等相議して大門は入るとを拒みしらば其比名の聞えさる鳶の唐丸といふ人加判して一丸ふたゝび大門より内に入ふざるといふ証文のきて遣しけり斯て三年ばかゝ歴て彼証文い取返したり然るに此証文世は珍しきもれなきむとく一貴紳ゝきりは乞ゝまひて表裝して床に懸々賓客のあるをりと此物語してその奇物を獲たるを誇られけるとぞ

一丸夏の始日比親しき質屋に至りて今要用の事なきを銭貸したまへ替とゝべき物時移さゝ持來べしといふにぞさらばとていとるゝ隨に貸與へぬ一丸受取て還りしゞ頓て又入來て伏紗に包さる物取出てあれと二十両の金は猶餘るべれもれなれどあれを預け進らそるりといふ何やらんと開き見れゝ酒屋薪屋あゝに物買たるを促さる〳〵書出といへるもの〳〵最夥きを搖聚べて持來つるあり主驚きてあい三十両にも猶餘るべきものあれど貸さるにあらゝ借たるにて何ゝかあふん貸進らせつる銭ゝく返したまへといへば一丸頭を撫て其銭と松魚と酒とにありて今と殘りなしといふ主いよ〳〵驚きて去ばし物いとでをれば一丸も詞なくてありしの頓て家に還りて松魚をとう出て酒うち飲てゐける浩處に質屋の主入來てさくも御身ゞ行實はおもしろし書を讀み書を著し酒を嗜みて世事を憂ざるい能他人のあし得ゞたき所爲えかし漢土の阮籍阮咸劉伯倫抔の類にや最羨むべき事えとて切に賞て俱は酒飲て偖腰ある扇取出て是に歌書て賜とるべしといふにぞ一丸うち笑ひ引ふ

借金を質はおいても初松魚

もと発くくとん利もくとゝ〳〵へ

と云たゝめけれゞ此人大に感じ且即妙なるを嘆賞してぞ還りけるそれ脱落率かくの如し

一九少時ゝ富める人ありしゆゑ中比ゝ初の如くならぬ晩年にゝ子酔多設けて酒あるも多くゝ飲ぬれにより家もまゝ富饒よりしといふ

一九戯編に長たるのみならぬ手蹟も最妙にして畫をも能せり膝栗毛あゝの自畫を見ても知るべし

天保二年八月七日病に罹りて死ゝ墓ゝ淺草俚俗土善龍寺地中東陽院ゝ在り佛号を心月院一九日光信士といふ辭世句に曰

此世をゞどゝやおいとまにせん香と

ともゝつひにゝ灰さやうあふ

○山東京傳

名ゝ醒○字ゝ酉星○醒々齋と号ゝ又山東庵菊花亭等の号あり通稱を京屋傳藏といふ磐瀬氏あり

京傳ゝ江戸京橋銀座二丁目ゝ住して烟管烟包並ゝ家製の讀書丸其餘製藥を鬻て生業とゝ初め北尾政美ゝ畫を學びて畫名を棲齋政演とよび又狂歌をよみて身輕折助と名れる後著作を專とせり吾邦小説の中興者あり

京傳の著せる稗史ゝ文体一家をあしらくゝとして婦幼にも讀易く尋常ゝゝ聞熟れざる奇語見あらゝざる僻字等ゝ換して用ひず趣向新奇を主とし用意も亦深ければ其書の行るゝゝ古今其比あかりしといふ

行狀の大要ゝその弟百樹号を京山ゝ撰べる墓誌に見えゝれゞ左に錄ゝ墓ゝ本所回向院ゝあり

亡兄諱醒○字酉星○一字京傳○号醒齋○号山東庵○磐瀬氏○其先出レ自磐瀬朝臣八上○近世資詮者○仕太田道灌○爲謀臣○道灌

亡。世隱於勢州一志。祖父信篤。父信明。仕某侯。多病辭仕。隱東都市。娶大森氏。生二男。二男亡。兄爲其長。自幼好文。十歲寫孟子。今尚存家。自十九始有稗史之作。上梓者五十餘編。因茲其名聞海內。王公妾婦。牛童馬走。無不知矣。今茲文化十三年丙子九月七日病沒。歲五十六矣。予弱冠出仕篠山藩。病辭仕絆。與亡兄同筆硯有年。　無常風來玉樹碎　痴心月照蒹葭堂　嗚呼悲哉

愚弟　京山磐瀨百樹謹撰並書

但右にて生歲を云るさを沒年と享齡をもて數るに寶曆十一年の生產なり深川木場にて出生すと或人いへり

著作家常に稿本を草する時い物騷しさい更に寒暑を惡み來客の長坐を厭ふ事と皆然ありといへども京傳い殊にこれを嫌ひ平常草稿を綴るをりい食器を傍近く整と

せ置て時を定めを欲しと思へるときい食し又溺器をもその一室に備置て用をたしぬと聞けりその勉强實に想ふべし

舖上にて自畫贊の扇短冊あどをも闕ぎぬれば自詠の狂歌俳諧に發句の類多く世に傳りて今も人の誦する所なりといへども わきて妙ありと覺ゆる一二を擧れば

梵鐘を畫きて

家業夢中　始終滅亡　正直律義　格別氣樂

拂子如意を畫たさる贊

如何是通子再來に意夜前のゆしともち猪牙舟に孫むる

山々に一度に笑ふ雪解に

そまと沓々まゐい下駄々々

狂言い秋に半でムり升

柴のトぎれあ月の○

（以下失題）

348343

仲秋は月に処でくと今川ごの

をしへ ももどく酒宴遊興

京傳の著作書よく海内に行るゝをもて其風を慕ひ業を學ぶんとて門人たらんと
を乞ふ者多しといへども絶てあれを許諾をるとなし故に自著の小冊絞染五郎剛勢
談○万福長者榮華譚ゐ斯の如くあり。あまとうをはがましくいへども京傳かた
へ戯作の弟子入うさく冷斷ゆ上ひと見えさりさをども猶其門に遊べる者關亭傳
笑とゝじめとして京傳門人鼠毛と物ゐ見え又門人拜田泥牛といふ名も見え山東唐
洲といへるも門人あり是等い已むを得ぎしく允せしよやあらん
世俗己をよしと自負する者をさして自惚といひ自惚を又艶次郎といふ此艶次郎と
いふ詞い京傳の著書より起れるありそい嘗戯れにものせる江戸生空氣蒲燒とい
ふ冊子ゐ自惚ある若者の名を艶次郎と号たり然るゑ此冊子大に行れ遊郭などに
て自惚の客人をあをゑ擬へその異名と艶次郎と呼び習ゝしゝより竟ゑ江湖の流行

詞とありて今も猶人口ゐ遺るとといありぬ今嫉妬を甚助といふも此類ゝ

右の冊子い寛政九年の刊行ありその翌年ゑ三和ごの著しゝる冊子又繰返艶物語
といふを京傳畫名政演畫きぬ是前年に空氣蒲燒大ゑ行をしによりての作意にて題
号にもかく艶次郎の名を寓して命しものあるべし按ゑ艶次郎い艶治郎といふ漢
語の治を次ゐ換しもの歟

或説に舊氏い拜田といふよしをいへり又舊号を寶山と云るよしをもいへり寶山の
号ゝ古き冊子の印章に寶山の兩字を用ひたるあり又浮世繪師考といふ字本を閲そ
るゑ是にも寶山と号ゝとあり

文化十四年二月弟京山京傳の死せし翌年京傳が年來用ひられたる文机を淺草寺の境内あ
る八丸祠の傍に瘞て碑を建つ碑の表面にゝ京傳ゲタ弥く作り置々る文机の
記を勒し背面にい太田南畝蜀山人の撰文を彫たり今全文を左ゑ擧ぐ

表面

明和六年といふとしの二月ごろ齢九歳とんふに師のかどをいりたちていろはもじ習ひそめしとり親のたまもりしふづくゑあむ此つくゑにありけるされゝつくりさまもおろそかにてみやびたるかたい露あけれどもぶらし捨ぢとし頃たのもしくてかたちをさらぢひとり愛つゝありべしとしい五十にちかく何くれとつくをる冊子と百部とあえたり今いおのごゐゝろたましひもはれ〻しうまあこもかすみもくゐいつしゐはれもたゐろきかちにもごのみなどしてもろおいに老しらへるさまあるいあそれいかゝいせむ

耳もそゐね腰もくゝけて諸ともに

まにふる机あれもおいたゞ

山東庵京傳

背面

翁諱醒。字酉星。号二醒齋。又号二山東庵。稱二傳藏。以三其所レ居近二京橋。一字京傳。故其爲二京傳一最著。磐瀬氏。其先出レ自二磐瀬朝臣人上。近世資詮者。仕二太田道灌。爲二謀臣。道灌亡。世隱二於勢州一志。祖信篤。考信明。仕二某侯。多病辭レ仕。隱二於東都市。娶二大森氏。生二翁及百樹。翁少好二稗史小說。數百著作□富。戲文幻說。繆悠無根。能使二人悲。能令二人喜。坊間書賈進二於剞劂一者。利市三倍。於レ是兒童走卒。莫下不レ知二京傳一者上。晚悔少作無益二於世。改勵刻苦。搜二索奇秘。著二近世奇跡考。及骨董集。二百年來奇跡逸事。考據精確。可二以補二小史一矣。文化十三年丙子九月七日沒。歳五十六。葬二國豐山回向院。弟百樹埋二翁幼時寫レ字案於淺草寺中梯本祠側。以遺財建レ碑。刻二翁國字記言。以告下後之讀二其書一而不レ知二其人一者上爾。

文化十四丁丑春二月

江戸南畝覃撰

文化五年著作の小冊に辻君所謂夜發をおはく畫きたる繪樣ありて或い偏盲鼻缺また鼻より頰へかけて膏藥をひたとうちたる光景あゞ見苦しき姿に畫きあしゝを實の辻君あれを見ていゝに吾等なれゞとて斯まで醜き形狀にていわらぬを畫きひゞめたるい是みゐ作者の所爲ゝ京傳をもし途中にて見るとあらゞ捉へて此よしを怨んものをと探て相譚あゝせて置つるゞの一日黄昏にうち連て其場所へ往んとそる折しも偶京傳に出逢ひたりその中に京傳を見識れる者ありて彼まそい京傳あれ日比の怨と述よゝーとゝふ程こそあれ伴ひつれたる辻君等むらゝゝと走寄り京傳を眞中ゝ取囲み口々にたけり罵る京傳い思ひ設ぬ事あゞゞ驚くと大かたあふぎそのうへ臭く穢むしきと限りなければ術よく勤解れども彼等い猶聽ず汚きを厭ふと見て故ゝ取つき縋るもありてはとゝくゝ迷惑に及ひしを京傳ゝとにのくにいひさしらへて吾後日に此言の去るしを見せん今い放ち返せよと只願諭してやうやくにて其場を推遁て還り後に人して彼徒に前日の謝物として金を贈りしゝゞ辻君等も大にその誠心に羞てその後い怨を含ざるのゝならゞ深くもその德に感服せしとぞ是より京傳の名彌增に高く彼書の行るゝとも亦隨て三倍せりといふ

京傳十八歲にて始めて書を著しふこそゝ文化元年刊行の自作の小冊作者胎内十月圖にその年にて二十七年戲作あゞそよしいへゞゞ安永七戊戌年にあたり此時十八歲あり然るゐ前に擧たる京山ゝの撰文の墓誌に十九より始て稗史の作ありといへるい安永八年刻成て發行に及べる時の事をいふにて胎内十月圖にみづから書けるい稿本の成りし時をいへるなり

文化十三年九月七日病むと數日にして死ゝ享年五十六兩國回向院に葬り佛号と辨譽智海京傳といふ遺蹟い弟京山ゝの繼ぬ

因ゝ云京山い名を百樹字を鉄梅といふ幼より文武を嗜み弱冠にして出て笹山侯ゝ仕へ後多病ゝよりて仕を辭し鉄筆の技をもて業とし又好て稗史を著し兄と俱ゝ名あり文政五年ゝ建さる壽藏の目記にその年五十三歲あるよしをいへり然れ

八明和七年の出生にて京傳よりい九歳おとれるあるべし

○式亭三馬

氏を菊地○名を久徳○字を太輔○通稱を西宮太助といひ式亭三馬と号し本町庵○四季亭○酒落齋○哆囉哩樓○遊戯堂等みなその別号なり

父を菊地茂兵衛といふ八丈島鳥脚神社の祠官菊地某の子ゝ茂兵衛故ありて江戸に移住し三馬を浅草田原町に生めり

三馬幼にして奇才あり十八歳の時既に書を著し其名早く都下に聞ゆ後某家の婿となり配偶の女病て死しゝゝ彼家を去りて四日市ふ卜居し其比より専戯作をなし後石町新道に移り遂に本町二丁目に居を定めて藥を鬻ぐをもて業とし巧に一世を紙筆に間に玩び兒童走卒もまれを知らざるものなきに至れり

三馬嘗八に語りて曰らく吾伯母と太守公の奥殿に仕へまゐらせけれゝ予幼き比伯母へ對面のため奥殿へ至る毎に好む所の道あれゝ傍にありあふ冊子をとりて讀むをその席に來合せ仕女たち此童歳にも似氣なく書を讀ひとの拙からぬ今の程より

斯文才あるべく後にいいうあるものにうあらんぞらんあどいとれしが十三四歳の比より所有戯曲本をも讀盡し十六七歳の時戯作の志あり十八歳にして始めて天道浮世之出星繰といふ小冊を著し上梓しぬ是い寛政六年の春之此冊子を作るのさじめ夜寐るにも衾の袖より手を出して稿をあしたり斯てその成れる後みづから雅号を命んとて然るべきと思へる号三四を小さ紙よりさつけ其紙と小くおし捻て手づから傍に投てそれを又拾ひとり得たる所の捻紙を開くに書つけありし雅号と即式亭三馬にてありしゆべ是にて心を決し遂に此号を用ひたりと語れるよし某書に記せり

寛政十一年俠太平記向鉢巻といふ書を著しゑに人これを怒れる者ありて官府に訴へ三馬まれによりて罪を獲たりしのち幾程もなく釋されけり其後親族朋友おど爾著作の業を廢せよと諫れども三馬一跌をもて敢其初志を變せず翌年又一書を著しぬるに前年の事よりして其名ますく高く竟に一家を成るに至れりとぞ

三馬に二代目芝全交になるべしと慫慂る人ありけれども三馬答て業よ拙くて徒に古人の名を汚さんと本意にあらぬとて辭みけるよしなり然れば自著は樂屋通及馬笑ゲ作廓節要にも式亭三馬儀古人芝全交の遺言よ付此度より二代目の全交と可相成筈よい得共いやしき妄作を以て古人の高名をけがすもい恐れ有と存じいまゞ改名い不仕差ひかへ罷在い猶不相替全交 錦 と被思召御一笑奉希いと云るせり亦卓見といふべし

三馬著作に敏捷にして稿を草する時三日三夜急案とことわりたる冊子も多くあり文を脫成すると屢次あり故に卷尾に三日三夜急案と記したる冊子も多くあり文化ゆはじめよと書肆の三馬よ稿本を乞ふ者特わ多くその約束の期よ後れ債らるゝに苦みて五日或と七日程づゝその書肆の許にいたり一室を借て草稿を起しゝとあり例へゞ今日まで某甲ゲ樓に在れゞ翌日わ某乙が離亭にゆゑ此處彼處めぐりくく尚それにても手の屆で約束に後れたる書肆にい責らるゝを苦みてその行方

を知せぞ後よやうやくよてそをゞ方へ廻りもゝはどおりしといへり

三馬旁狂歌を能し撰集の狂歌觸ありてその道の人に敬仰せらる當時世俗の流行詞にいつもお若ィねといふ語を專いひとやしゝゐゞ或人彼流行詞をとりて「さやり詞ちらへて達磨さんいつもおわかいめしもれたのり此歌原書に誤脫字ありて讀みゞのさしと詠て見せしに三馬曰此歌ハ書畫會の席上あゞにて物に贊乞を て即興にそるよいよしといへゞも近休れ狂歌おハ得おゝ迄吾おふば如此こそ詠むべゝれとて「そゞ堤老木もときにおくれぞていつもお若い花のかはゞせと口を衝て朗吟せしゝゞその人即詠よ敏捷おるを感じて已ぞ凡書畫の會筵に於て贊のかれに應じそのしゞに取あへず贊の狂歌を詠出て書て人よ與るハ三馬よ双ぶ者おのりしとぞ

三馬狂歌の秀逸もとよハ多しそハ中ゞも殊よ面白しとおるふを左に錄せ

達磨の贊

如何祖師西來意九年面壁ハなんさんも苦界十年お客と壁とよらみ破る身ハ蘆の葉のそれあらぬうきふし迄げき川竹の流に立る眞實ハ色客へれ操よして不立文字のきをぶをあれゞ直指人心のもびきり、あゞ以心傳心の格子頭見性成佛の床の内をまるハ本來無分別きれるハ心外無別法迷へゞ通も不通とおり悟れゞ不睟も睟とある柳巷花街翠帳紅閨柳ハ綠花ハくれおゐの禪味にかよひくるわのならひ禿ハみどりとよぶとも花もくれおいハ客の心のいろ〳〵の吁駒下駄の呵囉々々々喝

達磨さん腰から下ハ怎麼生

女をたらゞ一物もおし

ひとつ家のいよしへ五町まちの今を思へゞ

日ハくれて野よハといとで宿からゞ

淺草寺のうしろなりけり

或人三馬よ語りて曰頃日吾友某といふゞ講義にて源氏物語末摘花の卷を聽つる

げ是いいさゝゝの戯作の幇助ゑもありあんやと問ひければ三馬答て彼物語ゝ諸物語中の翹楚あれば人々多く和文辭を綴るゑ幇助とせざるものあしといへども戯作者の素意いさゝるむつかしきものゑわふぜ和殿今より戯作をあして心を慰めんとの思あらば源・語一部の講釋を漏さず聽くにも及ばず源語の事も水滸傳の事も少許づゝ聞はつりし事あらば似つてらしき事をとりあしに書んこそ戯作者の働きとそる所あれ餘りに源語ゑとりもぎてかや〳〵と笑ひさや〳〵ととりひしぎなどの類あまごあしの源氏風ゝ聞もうるさしとて手を拍て笑ひたりと某書ゑ見も

文政五年閏正月六日病て死を享年四十八深川雲光院ゑ葬る佛号を歡譽喜樂奏天信士といふ辭世の句に曰

善もせを悪もつくふず死る身ゝ
地獄も譽を閻魔ゑのらを

○曲亭馬琴

氏ゝ瀧澤名と解字ゝ瑣吉通稱ゝ清右衛門後篁民と改む馬琴ゝそれ号あり簑笠○玄同○閑齋○顯齋○信天翁○狂齋○愚山人等れ別号あり

初飯田町中坂下ゑ住し著書の序文あゞゑ飯岱と称る是なを後家を婿に讓りその身ゝ男宗伯と同居を宗伯名ゝ興嗣琴嶺と号す松前侯の侍醫とあり神田神社の側同朋町ゑ住む文政年中馬琴剃髪して通稱を篁民と改先後又四谷信濃坂れ上ゑ移る

其先ゝ三河に出づ曾祖興也にいたり武藏國埼玉れ人興中全直の次子興吉を養て嗣とあを興中ゝ源頼政の郎黨猪隼太守資の裔あり興吉の子興義兵法ゑ通じ擊劍射騎をよくを馬琴ゝその季子ゝ

馬琴少ふして書を讀み長ぜるに及びて才高く殊ゑ著作を好む寛政二年の冬稗史二卷を編て翌年刊行を是書を著その始にて時に二十四歳あり即題号ゝ廿日餘尽用而二部狂言とあり芝神明前和泉屋市兵衛發市を次て同五年發刊しゝを浮世街道御茶漬十二因縁

三冊と荒山水天狗鼻祖三冊と花團子食家物語あり是より年々數板に及べり

馬琴の生歳は沒年嘉永元年八十二歳より逆算そゝば明和四年丁亥なり又剃髪の年は傾城水滸傳卷の八花からの阿達ゞ出家の條に書入して呉竹の世をそつるにもあらねども云々と云るし剃髪の歌を添たり文政七年にこの稿本をおしつるにて其年剃髪の証とそべし且文政七年八島定岡ゞの著せる狂歌現在奇人譚後編よも馬琴の事を載て今茲五十八髪剃おろしてみづから笠翁と号くと云るぜり

馬琴疑を幕府の儒官柴野栗山に質し經籍史傳親ざるものおく學力の長ずると他の著作者流の及ぶ所よあらぜ故に小説の外に著書亦多く簑笠雨談。燕石雜志。烹雜の記。玄同放言。獨考論。羈旅漫錄。吾佛の卷。俳諧歳時記等は殊よ人の愛讀する所なり

馬琴寛政の初より五十餘年一日も筆をおくことおくてそべて著る所は書三百部に及ぶ其書悉く善と勸め惡を懲そにあらざるものおし就中讀本にて世よ聞えたるは椿説弓張月。朝夷巡島記。俠客傳。南總里見八犬傳の類あり又合卷よては傾城水滸傳。新編金瓶梅等大よ世に行はる殊に八犬傳の行とるゝと我邦古今の小説こをよ比ぶべきものおしといふ

馬琴稿を草そる時俗よ所謂ぶつゝけ書にして綴りもくに文章水の流るゝごの如く少も淀むとおく立地に一卷をあを文体よく一家を成し後生これを學ぶもの多し

緒餘また狂歌をよくも其即詠に速おるい人の感ぜる所ゝ嘗人あり短冊一枚を持來りて馬琴ゞ豫て詠みさる歌よ。乾網も屠蘇れ袋のなよよ似く祝ふ銚子れ濱の初春といふ歌を書て給されといふ馬琴承諾てさく墨磨り筆執りて彼短冊取揚て上に海邊初春と題して初よほそ網と書べきを偶思違て屠蘇と書ぬこい誤てりとて霎時躊躇へゞ其人曰然ば他の歌にても苦からぜといひけるよぞ馬琴其筆を引ずして

屠蘇くまぬ浦の苫屋も春くれゞ
香よ醉ふ門の梅れ花貝

とかきて與へけれどその人と大に感賞し數回禮を述て還りける是い其席に居合玄し人の筆記に見ゆ

或人初て著述せし冊子の事を問ふよ馬琴答て曰寛政二年深川よて何やらん開帳のありける時京の壬生狂言來りて大に行れしのば其事より思起してこの用尽而二部狂言の二冊物を編を書い豊國ごものしたり始いかゝる事より案を起しゝこと語りなるとぞ

天保七年齢古稀よ及びぬ諸人勸免て賀筵を開くべしといふお馬琴初い允さゞりしうど勸免て已ざるにぞ秋にいさりて終よことに任せて八月十四日柳橋ある万八樓よ文人墨士を會合そるよ此日盛會あり馬琴自祝の歌を玄ゝ免ー扇紙紗などを人よ與ふ歌よ曰

尽せじあよとひいさゞきいし龜の
よろづよもぎる嶋をおふまで

名にしおとゝ出よ千歳の友にせん
あくきみの龜のくれ笠松

南總里見八犬傳と朝夷巡嶋記とを評して犬夷評判記と名づけ文政元年六月刊行を黒き表紙をうけ横本三冊とおし批評い三枝園主人答述い馬琴考訂い樓亭琴魚おり自笑ゞ役者評判記の体に倣ふ是にても二書の大に行れしを知るよ足るべし

馬琴その友を擇ては溫よ俗人ゟ交通せゞ常よ帷を垂れて引籠り訪ふ人ゆるも生面の客よい病よ假托て敢面するとなし其簑笠と号そると即隱遁の義にして衣笠内大臣の歌に身のうきときのかくれゞにせんと詠をし心操に同く簑笠の二字と其身れ大關目あるべしといへり然れゞよやそれ自詠の歌にも「世よ見びく身い隱ゟ簑うくれ笠ゆゞある名れを打出の槌などあ」

八犬傳初輯の稿を起しふい文化十一年よして此時馬琴全編脫成せしい天保十二年四十八歳八月此時馬琴十五歳なれゞ其間星霜二十八年を歴ゝり晩年にい病眼大に衰て代寫させ

て全局を結びしのゞ斯あん詠める

ゆきとゝ見る人おもへ八重そゞれ
かゝるやみ目にあとゝさそ書

又八犬傳の卷尾に題えし歌ゝ

浮草けうゝしさびもいましゑれ
筆をよるべの根あし言の葉

馬琴務めて和漢必用の書籍を購求ると五十餘年既にして所藏の書五六千卷、六十餘櫃ゝ及べり毎に衣食を省き節儉を旨として書籍を購ひけるよしいみつからも物に載せたり然れゞ引証該博あるも亦宜ありといふべし

東岡舍羅文ゝ馬琴の兄ゝ名ゝ興旨臺右衛門といふ性俳句を好み詠ずる所多し寛政十年八月十二日死ゝ享年四十源光寺ゝ葬る墳墓の臺石ゝ病中の吟を馬琴ゞ書きるゝ勒付きり馬琴ゞ著書の像贊ゝ羅文の詠を引きさるもの多けれゞあゝに記しつ

馬琴京ゝ遊べる時伊勢國を過り津ゝ宿りて浴せんとして女に案内させけるにあゝなりとをしふ見れゞ戸棚といへるものゝ如きものあり傍に大なる桶ありけれゞ湯ゝあれありと心得てさく衣服うち脱てかの戸棚に納んとそるを女驚き止めてそゝ衣服納る處にあらゞ即浴しさまふ處ありといふにゞ。さてゝとて衣服ゝ側に置てかの戸棚の内に入て見れゞ湯ゝ一尺にも盈ず側にありし桶ゝ水桶なりしゝゞ馬琴をかしさの餘に

もれゝ名もとあろにゝよまくのとるゝ
江戸の戸棚ゝ伊勢れそゑふろ

とよとけるとゞ最おもしろし

馬琴その名都鄙を動ゝといへゞも人の師とあるとを好ず故に戲墨の門人といふ者あし著作の冊子に魁蕾子又傀儡子ゝ作るあゞいふ名も見えれゞも未生の人にして實に其人あるにあらゞ然れゞも猶その門人さらんと欲して紹介を求ゝて切に乞ふ者多

けをゞ只其人の心得の爲に身を修め家を齊べき事を説示し又暇ある時い老子莊子などを講ぜるまでにて戯墨の事い固く辭みしとぞ云かるゝ其中にて志の深き者い入門を辭るゝい力及ざいうで琴の字を戯号に許したまへといふ馬琴答て琴の字をもて名号とあゞ者吾のみならず古今の儒士に其例多しそい心のまゝなるべしといひけれゞ皆喜びて琴雅或い琴梧琴川琴魚など名のる者あり其中に櫟亭琴魚い殊ゑ文才高く青砥石文。窓螢餘譚等の著あり

馬琴の勉業い亦常人の及ぶ所にあらず毎日夙に起出て机にむゝひ其夜人定まで稿本を綴りて疲勞を厭ざ亥の刻過ていゝ睡氣の催るまで書を讀てみづからの樂とそもし佳境に入るとき天明を知らず曉鴉ゑ驚されて頓て起出て机ゑむかふ日も亦多し斯の如きと數年ゑ及びけれゞ逆上口痛の患起り年五十ゑ至てゞ齒いみな脱落く一枚もあらぬ夜枕ゑ就くとき沖臥せゞ瞑眩て堪へぬ横ゑ臥せゞ纔ゑ此憂おし因て醫師の詞に從ひ是より後い夜學せぬ書著も亦年毎ゑ二板と定めて其餘い需に應ぜぬとあく夜も早く枕ゑ就しのゞ身もやうやく健全に復せしとぞ

或人馬琴を訪ふゑ馬琴語りて曰是れまで自著の冊子一部も漏さぬ所藏せしゞ一年の夏二階の物乾さて晒書けさ先風にあてたる時外へ吹飛さとて文化三年出板せる武者修行木齋傳一部を何處へゝ失ひつ其後骨董舗なんぞにて彼書あらゞ買取らんと思へども近來い老脚自在を得弥ゞ杖を門外ゑ曳ぬ遺憾い此事のみと語りけれゞ其人答て曰君公務の暇ある日い市中を徘徊ぬ故にもし彼書を見るとあらゞ必購取て進らせんと約しく常ゑその事を心に占め間斷なく搜せども見當らぬ初約ぬし時より五年目にく料らぬも手ゑ入たれゞ取あへぬ馬琴の許を訪く懷ゑ出し木齋傳を贈りしのゞ馬琴歡ぶと限なく一旦の約言を違へたまゞぬの賜物い何にも優くいと有ごのたし深心の切なるより全御手ゑ入たるものあらん長く秘藏し侍る

是ゑよく拙著悉く闕ぬ藏ぬるを得たりとく欣喜色ゑ顯れしとぞ事載く某人の筆記ゑ在り俱ゑ其志の厚きと今人ゑい亦輙く望みゞさし

晩年老眼大に病衰しく明ならぬ然れども猶著作を輟ず婦をしく筆を執らしめ己口授しく草稿を代寫せしむ其事いみつゝから八犬傳第九輯五十三の下卷回外剩筆よ記したり其條に曰九年以前癸巳今云癸巳い天保四年の秋八九月ゑ時候よやゆ是りん有一朝不圖起出けるに右の一眼見ることを得ぎうち驚き且訝りて故兒に示ぞに瞳子上の方流たり療治あさるべしといひけり其後親族朋友書賈等まで治療を薦る者多ゆりしゅど吾敢從いぞ且おもへふく吾い幼稚より眼の患おく流行目ざおも病ま とあらず然るを今一朝に右明を失ひしと年來讀書筆硯の疲勞あるべく且冬春毎に高き火桶を坐右に置て机邊の寒氣を防ぐ事既に久しくありしゅど其火氣何時と おく右明よ入りて乾ゆさぞさるにぞあらむぞらん譬ゞ老樹の片枝立枯たるに異あ らぞ非如醫療よ術を盡ぞとも草根木皮のよく及ぶべゑにあらぞと尋思ゑて一日も筆硏を排斥せぞ初い覩忽見難ゆ毫を操るに不便ありしにそれも熟てゑ不便にも思いぞ其後故兒の憂よ丁りし年も世渡りあをゞ忌ども關てい又筆を把らざることを

得ぞ其次の年四谷へ移徙ゑても左明い異なることもおけれゞ著編ゑ倘年々に綴りぬる程よ戊戌の春ゑ時候より何とおく左明も亦翳ひやうありしに夏に至りていい よゝ其異なるを覺しゅども倘悟らぞゑと眼鏡の曇りたる故おらゑと謬思ひて俗に本玉と歟いふ水晶製の眼鏡の價貴ゑを厭いで此彼と多く購求めて掛替々々凌ぐもれかゆ己亥の春に至りてといよゝこのそみて病眼あるを知りながら本傳いまゞ大團圓に至ら弥む書肆の需を推辭も得せで猶辛じて綴る物ゑの外ゑもあま々り恁而去歳庚子の春までい本傳の稿本も故の如く十一行の細字にものせしゅども夏に至りてい只朦々朧々として細字を寫ゑ得なら弥ゞ其稿本を五行の大字にしつ其も手撈りよて去歳の秋九月本傳第九輯四十五の卷までうゞり果して刊行の書肆文溪堂の責を塞ぎにきのくてい明年四十六の卷以下を綴り果さんと心許おし先や倘のくてある程に今一卷おりとも綴らぞやと愚心を勵して第九輯百七十七回一顆の智玉途に一騎の驕將を懲らそといふ一段を五行或い四行の大字にもの

去ぬるよ字行も詮釘兵兵にて且墨の續くぬ處ありて讀がさしといへゞ开を宅春に補せなど去ぬる程よ十一月に至りてい宛雲霧の中よ在如く又朧月夜に立に似て一字も寫と得あらぎありぬ只筆研不自由なるのをあらぎ書畫を見ても楚と見え ぎ僅よ晝夜を辨じ東西を知るのをいくよとも せん術あるをゞ書案を退け筆を投捨て獨歎息れ侮まりに

あごくふるかひろまなゝを見えぎあまし書卷川に猶ヨさる世ととうち詠じて爐よ寄てのを居程に文溪堂及貸本屋あどいふ者さへ聞知りて皆慨しく思いぬとあく爲に代寫そべき人を索るに意に稱ふ然る者のあるべくもあらぎ吾も亦失明てい生甲斐もあゞれど這年の秋九月より次の年まで人の薦る醫師を三名まで轉藥去ぬをどもいまゞ毫も效驗あらぎ然ど今茲辛丑の春よ至りて吾又おもふに八犬傳い今昔有がさき大部の物の本なるに始ありて終なくい只看官の飽ぎ思とんのをならぎ文溪堂ゞ爲にい後ゞまでも利を全くぎごのたくて遺憾こそあふんぎらめ人の爲に誤り

て忠なふぬい吾も亦恥る所ゝ然ゞとて吾孫興邦い倘乳臭ある机心うせぎ且武藝を好ゞる本性あれゞ恁る郡助にあるべくもあらぎ他ゞ毋と人並によ去り書もそれば敎て代寫させどやとやうやくに思ひへしつ第百七十七回の中音音ごの大茂林濱にて再生の段より代筆させて一字毎に字を敎え一句毎よ假名使を誨るに婦人い普通の俗字ざも知るど稀にて漢字雅言を知らぎ假名使てにをはざにも辨へぎ偏傍そらまゝろ得ざるに只言語をのをもて敎えて寫をる吾苦心といふべうもあらぎ況て敎を承て寫く者と夢路を迎る心地して困じて果いうち泣くめり然而代寫一枚よ滿れゞ讀返させて又敎て傍訓を寫そるに熟字を知らぎ又句讀をおふろ得弥ゞ讀時或い字を脫し或いあき字と添て讀めり讀そふ輙うらざるに知らぎおふろ得ざる事を口授せられて寫者の艱難を思へゞいと痛さに幾度う已どやと思去を又思のへして筆捨れ松のふる葉も言ど葉も子等よをしえくのふとるぞ憂況とうち詠去て且慰究りゝ一二卷代寫させぬる程に他もやうやくに熟て苦心初の如くふいあふず偏

傍あどい稍〻死まへ知りて言を費そも舌の疲るゝまでゝ至らず編中の出像い代寫さそべき者あければ吾只其人物を圈點じてもて畫工ゝ傳ふるに委細ゝ注文を代寫させぬるのゝ稿本いさらゝ書畫工の寫本も吾いふ如く寫りや否心許あく思へども術なし況文中に故事あどを引用ひんと思ふに原本ゝ渉らざきば暗記の失あらんとを恐をて命じ其書を拿出させて讀そるに漢籍い及ぶべくもあらず假名まじりの古書といへども傍訓あきい得讀ず强て讀ときゞ鴆舌侏離にて要をあさねゞ援用ふべくもあらず寫そるとい敎もそきど讀そる事い吾見るにあらざきゞいよゝ難義にて實にせん方あし然ども敎誨を承る者の困じながらも倦傳よく勉にあらざきゞ這十卷を綴り果して局を結ぶに至らんや縫刺の技薪炊の事あどこそ他ゞ職分なを文墨風流の事ゝ代らせて其要を倣さまく欲そるい理あしとも理あしと知りつゝも月ゝ累ねて今玆辛丑の秋八月廿日といふ日に本傳第百八十勝回れ下編附錄目諸將の成敗其尾を備にをといふ結局大團圓まで稍稿じ果さりき云々と見も

嘉永元年十一月六日病く死ゝ享年八十二辭世れ歌ありとく傳るい

世の中ゝやくとのごをさもとれまゝ

かへそゝなゝをとりちの人形

新編稗史通終

明治十六年七月十四日御屆
同　年七月廿八日出板

編輯人　東京府平民　西村宇吉　神田區花房町七番地

出板人　東京府平民　宇都宮榮太郎　同區花田町壹番地

東京神田區花田町壹番地　耕文社

日本橋區通油町　水野慶次郎

同區新よし町　山本平吉

〔定價金拾五錢〕

發兌元

各地賣捌所

東京芝三島町	山中市兵衛	同牛込肴町	深野彌兵衛
同横山町	辻岡屋文助	同本石町貳丁目	小宮山昇平
同通三丁目	丸屋鉄次郎	同本郷春木町	解明堂
同兩國吉川町	松木平吉	同兩國米澤町三丁目	稲垣良助
同南傳馬町壹丁目	蔦屋吉兵衛	横濱太田町	伊勢屋梅藏
同神田裏神保町	鶴聲社	大坂本町	岡島眞七
同神田雉子町	嚴々堂	下總千葉町	立眞舍
同元大坂町	法木德兵衛	信濃國諏訪角町	藤森平五郎
同室町三丁目	滑稽堂秋山	陸中盛岡	木津屋藤兵衛
同蠣殼町壹丁目	榮文堂篠田	同	久保田屋庄兵衛
同新よし町	眞明堂	同石卷	三陸屋利兵衛
同長谷川町	武田平治	岩代福嶋	立身屋宇兵衛

913.5
N814h

089600-000-7

913.5-N814h

稗史通

西村　宇吉／編

M16

DBM-1741